

## 6. 実時間データの収集・分析の一試案

千葉喜英 (国立循環器病センター)  
村上雅義 (周産期治療科)  
神崎徹 ( " )

周産期に関わる実時間データは、近年急増している。これらのデータは、その場での臨床上の判断基準として利用されるだけでなく、将来の周産期医療に充分還元できる情報となり得る。そこで、実時間データの収集、分析のシステム化を以下のように行った。

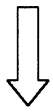
実時間データは、新生児としては、心電図波形、呼吸曲線、 $TcPO_2$  曲線、 $FiO_2$  曲線、圧波形等、胎児および胎児環境としては、胎児心電図、胎児ドブラー信号、超音波断層画像、陣痛曲線等、母体としては、心電図波形、呼吸曲線、圧波形等である。これらの信号を一同に集め、ハードコピーをとる。あるいは、磁気テープに原信号のまま入力するというデータ収集システムを作成した。このことにより、各々の実時間データが同時記録され、相互の比較検討ができた。またデータの再現、

再検討が可能となった。次に、時間軸密度を心電図波形レベルから心拍数レベルに変化させる、すなわちアナログデータをデジタルデータに変換させることによって、1分単位あるいは5分単位のトレンド表示をシステム化した。これによって、実時間データの日内変動が一目瞭然となった。これらのデータはハードディスクにおとし保存する予定である。さらに、実時間データを症状・処置・検査結果等の日常医療情報と対比させる為、これらの情報を同一システム内に入力し、カルテに相当するものを作成する案がほぼ出来あがり、実行にうつせる段階まできた。

将来の方向としては、コンピュータ支援のもと、重要な実時間データの選別、収集が自動的に行われ、さらに希望するデータが直ちに再現できるシステムの作成を考えている。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



周産期に関わる実時間データは、近年急増している。これらのデータは、その場での臨床上の判断基準として利用されるだけでなく、将来の周産期医療に充分還元できる情報となり得る。そこで、実時間データの収集、分析のシステム化を以下のように行った。